



## 第30回札幌くらぶサロン コロンゴルト 忘却のヴァイオリンソナタを聴く



コロンゴルトを演奏する桐原宗生さん

札幌交響楽団は今年創立60周年を迎え、1月16日(土)豊平館で第30回目になる「札幌くらぶサロン」が開催されました。しかし新型コロナウイルスの猛威が収まらず、サロン第3部の「ニューイヤーパーティー」は中止になりました。

サロン第一部「札幌定期演奏会プレトーク」は、八木顧問(作曲家)に定期演奏会上半期の聴きどころを解説していただきました。今期のテーマ「愛と死」にインスパイアされた作品について、札幌の過去の演奏を録音で

振り返りながら、作品にまつわる作曲家同士の繋がりや影響また嫉妬について、作曲家ならではの視点でお話ししてくださいました。

続いて「楽譜支援金贈呈式」が行われ、札幌くらぶ上田文雄会長からヴァイオリン首席奏者の桐原さんへ支援金50万円の目録を贈呈致しました。桐原さんから「その時々々の要求に応えるために新しい楽譜の購入に充て、演奏でお返しします。」との内容のメッセージをいただきました。

サロン第2部「ニューイヤーマニコンサート」は、札幌ヴァイオリン首席奏者の桐原宗生さんをお招きしました。鹿児島県出身で、コンクールでの輝かしい経歴と東京シティ・フィルで首席奏者を務めた経験を持ち、ピアノの反田恭平さんとの共演など話題の尽きない桐原さんは2019年に札幌に入団しました。そのきっかけとなったのがPMFとの出会いで、PMF・札幌イレブンの一人として第二ヴァイオリンを束ねています。

演奏された楽曲は全て桐原さんの十八番(おはことも)と言えるE・W・コロンゴルト(1897~1957)の作品でした。「劇伴音楽『雪だるま』よりセレナーデ」で始まり、「ヴァイオリンソナタニ長調作品6」をメインとして演奏されました。コロンゴルトと言えばヴァイオリン協奏曲が有名ですが、ソナタの存在は知りませんでした。桐原さんのお話では、演奏時間が長大(40分)でピアノ伴奏の難しさ故に取り上げられる機会を失い、忘れ去られてしまったようです。この難しいピアノ伴奏を佐藤夏美さ



前列左から竹中さん、桐原さん、河邊さん、後列左から鶴野さん、下川さん、青木さん

んが見事にヴァイオリンにつけてくれました。譜めくりは札幌コントラバス奏者の下川朝さんでした。

桐原さんの演奏は、全身を音楽に委ね技巧を感じさせず、力まずに一音一音正確にそして歪むことなく繊細に奏で、この大曲を暗譜で弾き切りました。高音域を美しく響かせて昇りつめ、優しく切ない旋律が懐かしさを呼び、ピアノ伴奏はモダンなリズムを奏し閃光を放ち折り返すように音が連なり、まるで宇宙の彼方へと消えゆくように曲を閉じました。沈黙のあとに割れるような拍手となり、アン

コールとして出世作の歌劇「死の都」に残された幸せ」が演奏されました。この後、応援に駆けつけてくれた団員の青木さん(左)、下川さん(中)、河邊さん(右)、竹中さん、鶴野さん(以上右)から、コンサートやリサイタルのお知らせと、お話をいただきました。河邊さんからオペラの演奏と次世代の札幌への期待について、また竹中さんは念願の楽器との出会いについて熱く語られ記憶に残りました。最後に新型コロナウイルス感染の収束を願って閉会となりました。

### 2020年度 札幌くらぶ楽譜支援金 支出内訳

ストラヴィンスキー	交響曲第1番	186,340円
マーラー	交響曲第4番	310,365円
	合計	496,705円

## 3月～5月 定期演奏会

# 演奏会を楽しく聴くために

八木 幸三 (札幌くらぶ顧問)

第635回～第637回定期演奏会より注目曲を解説していただきました。

### 第635回定期演奏会

3月5日(金) 19:00  
6日(土) 14:00  
指揮 尾高忠明  
チエロ 宮田 大

湖面に波がたつような管弦楽の響きにはじまり、あらわれるモティーフはどれも風になびくような断片的なもの。おとぎ話の世界の細やかな色彩の変化に耳をすませているうちに、遙かな余韻へと消えてゆく。

■2020年度の定演テーマ「おとぎ話」は、コロナ禍で一曲目の変更を余儀なくされることもあったが、3月定期はテーマに沿った曲目が並んだ。

交響詩「魔法にかけられた湖」は、ロシア民話などを題材とした幻想的な小品を多く書いているリヤードフが、未完成オペラの素材を用いて作ったもの。人知れず魔法の中に静まっている

いる。ハープと弦楽器、さらに色彩豊かな木管楽器の響きは、夢のような世界へ聞き手を誘ってくれることだろう。

デジュー・ラーンキ

© 飯島隆



### 第636回定期演奏会

4月24日(土) 19:00  
25日(日) 13:00  
指揮 マティアス・バーメルト  
ピアノ デジュー・ラーンキ

いる。同じ作曲家の「ダフニスとクロエ」第2組曲は、ロシア舞踊団のディアギレフの依頼で作曲された幻想的なバレエ音楽。「夜明け」から第3部のほとんどがそのまま使われて

■2021年度のテーマ「愛と死」を受けて開催される4月定

期は、フォーレの組曲「ペレアスとメリザンド」が取り上げられる。ベルギーの劇作家メーテルリンクは、死や宿命といった主題により耽美的な作風で一世を風靡した。多くの作曲家が音楽を付けているが、フォーレの作品は「シシリエンヌ」など、お馴染みの美しい旋律で彩られている。

バルトークの「ピアノ協奏曲第3番」は、アメリカ時代において白血病だった作曲者が亡くなる年に書かれた。最後の17小節は弟子のティボール・シアリーが作曲者の指示により完成させている。先の2つの協奏曲と違い、作品の内容は急進的なものではなく、死を目前とした心境から古典的な作風となっている。第1楽章は、ピアノをそれまでの打楽器的な扱いではなく、温和で優美なピアノリズムだ。天国へ昇華するような宗教的瞑想を感じさせるアダージョ楽章の後、ハンガリーの民族的色彩が濃い第3楽章へと進む。

また、この回では、殆ど演奏機会のないストラヴィンスキーの最初期の作品、「交響曲第1番」が聴ける。バレエ音楽では「原始主義音楽」と呼ばれる斬新な手法で20世紀を代表する作曲家となったが、この作品は恩師であるリムスキー＝コルサコフに

よって指導が加えられ、ガラスノフやタネーエフ、さらにはチャイコフスキーの影響が色濃くあり、ストラヴィンスキーのイメージとはややかけ離れた楽想を持つ大作に仕上がっている。

### 第637回定期演奏会

5月8日(土) 19:00  
9日(日) 13:00  
指揮 広上 淳一  
ヴァイオリン 神尾真由子

められている。中間楽章の実質的なカデンツァは、ガラスノフ自身の作曲であり、重音奏法を駆使して作品中の最大の難所となっている。神尾の超絶技巧と広上淳一率いる札幌の豊かな色彩感の対峙は大注目だろう。

■5月定期では、そのストラヴィンスキーに影響を与えたグザヴロフの「ヴァイオリン協奏曲」が神尾真由子の演奏で聴くことができる。この曲は、作品全体が間断なく連結され、多楽章構成を含んだ単一楽章のようにまと

められている。この曲は、武満が尊敬していた作曲家、早坂文雄に献呈されている。



神尾真由子

©Makoto Kaniya

\*出演者並びに演奏曲目については変更となる可能性があります。

(写真協力:札幌交響楽団)

## 札響での思い出 〜札響と私〜

私とオーボエの出会いは、中学生の吹奏楽部でした。恩師は故・松浦真先生でしたが、当時中学生が吹いていないオーボエを私に与えてくれました。恩師の息子さん(音大受験するため)に「札響オーボエ奏者・高橋志朗先生に師事していた関係で、私も中一の秋からレッスンをさせていただくことになりました。高橋先生は、当時日本中の



指揮者高関健さんのシャッターで

は、チャイコフスキーの4番の交響曲でしたが、前半にヤコビの「アコーディオン協奏曲」とヴィラ・ロボスの「ハーモニカ協奏曲」があり、オーボエが1本だったため、練習の初日に「その2曲はおまえがやれ」と指揮者の岩城さんに突然言われて、冷や汗をかいたものです。

当時は年間約120回の本番がありましたが、定期演奏会と「ほくでんファミリーコンサート」以外、スクールコンサートや小品ばかりの演奏会でした。札響のシステムも今と違ってゆるく、当日の朝にシフトが決まるようなこともありましたが、入団した頃から「グリーンコンサート」も始まり、北海道中を回りました。いずれの地でも、温かき聴衆の皆さんが迎えてくださり、終演後はいつも充実感でいっぱいでした。



最後の練習後、木管のメンバーと

入団した年の7月に小澤征爾さんが来られて、道内4か所を回るツアーがありました。メインはチャイコフスキーの5番の交響曲でしたが、4月に一度演奏していたので、同じ気持ちで練習場に向かうと、いつも自分が一番乗りなのに、その日は大半の楽員がすでに会場に入っ

ていて、まるで別のオーケストラのような緊張感で練習が始まりました。その時の演奏はしばらく後を引き、その数か月後に再びチャイコフスキーの5番の公演を石丸寛さんの指揮で演奏した時に、練習初日に振り始めてすぐに「最近誰かの指揮でこの曲をやったでしょうか？」小澤さんの指揮で演奏したと伝えると、「今までと全く違う音が出ている。練習する必要があるね」といって、初日の練習がすぐに終わりました。

その当時は、演奏会の後必ずと言っていいほど打ち上げがあり、毎回音楽談義でしたが、最後には楽器を吹く羽目になり、フアゴットの戸澤宗雄さんに『津軽海峡冬景色』の3連符のレッスンを受けているような状態になりました。次の日はモーツァルトのシンフォニーの練習でしたが、「昨日のようにやれ！」と後ろから言われ、演奏すると外人の指揮者もOKというサインでした。

### 札響合唱団2020年度の練習活動

札響合唱団は2020年2月25日の練習休止から、11月末の練習再開までなんと9ヶ月も

できるという幸せを痛感したのです。

練習再開に当たっては、先生方そして札響事務局の皆様方の各方面との調整などに御尽力いただいたことを深く感謝いたします。

練習再開に当たっては①検温②手指消毒③体調や生活管理シート④合唱用マスク更にはアイガード装着⑤会場での前後左右の配置調整⑥30分練習後20分換気の私語禁止⑦終了後の分散退場などの細かな感染予防対策が施され、慎重に練習を積み重ねました。

オーケストラプレイヤーで編成された指揮者のないオーケストラに抜擢されるほど、素晴らしい音色をもった演奏家でした。当時は、今の丸藤井セントラルの中に札響の練習場があり、そこでレッスンを受けていました。

大学卒業と同時に札響に入団しましたが、高橋先生はその時から1番オーボエを吹かずに、私にチャンスを与えてくださいました。最初の定期演奏会のメイン

は、チャイコフスキーの5番の交響曲でしたが、4月に一度演奏していたので、同じ気持ちで練習場に向かうと、いつも自分が一番乗りなのに、その日は大半の楽員がすでに会場に入っ

たが、「昨日のようにやれ！」と後ろから言われ、演奏すると外人の指揮者もOKというサインでした。

今回のこの時期に「体調不安」や「家庭・職場環境」から出演困難な方々もおられました。来年以降再び同じ舞台上に立てますよう切望しております。



指揮者2人、合唱団マスク着用、合唱団の前とオケの後に大きなアクリル板



合唱用マスク

札響合唱団員  
竹田 誠

## 「次代の札幌・PMF」は？



上田文雄新代表の基調講演

パネリスト四人とモデレーター（司会進行役）が紹介された後、パネリストの一人で今年ACFの新代表に就いた上田文雄氏が基調講演を行いました。

昨年（11月30日）の月、ACF札幌芸術・文化フォーラムの主催で、ACFアートサロンが開催されました。今回で24回目を迎えるというこの日のテーマは「次代の札幌・PMFくさつぼろの音楽文化を考える」。会場のカナモトホール会議室には、収容定員より少ない約100席の座席が広い間隔を取って用意されていました。

「文化と誇りあふれる街札幌」を目指す市政にもつながって行ったのだろうと感じました。サロンの後半はモデレーター



4人のパネリストと司会の外岡秀俊氏

ン）、富田麻衣子（ヴァイオリン）、島方晴康（ホルン）の各氏でした。上田代表が「PMF・札幌イレブン」と呼ぶ11名の中から選ばれた方達です。

この三人がそれぞれにPMFの思い出、札幌とのかかわり、コロナ禍の中で行ったこと、考えたことなどを熱く語ってくれました。

その話の中でPMFが天安門事件の影響で降って湧いたように北京から札幌にやって来たこと、第2回目以降のPMFの開催を札幌が引き受けることを当時の板垣武四札幌市長がバーンスタインの追悼演奏会で宣言したことを初めて知りました。

また、PMFでのバーンスタインはニューマンの交響曲第2番の第3楽章だけを念入りに練習したそうです。第1回PMFではバーンスタインの指揮でも聴衆は少なく、ステージの袖にいたスタッフや裏方さんも客席に座るように指示されたということでした。

コロナ禍の中では、これまで当たり前に出てきたことが出来なくなりました。苦悩がどなたからも伝わってきました。普段できなかった音楽の勉強や練習を通して、「自分が何を持っていて何を持っていないのかが見えてきた」との言葉は印象的でした。



いつもはピアノで聴く「トルコ行進曲」

モデレーターの外岡氏から冒頭に「札幌とPMFは札幌の二つの大きな宝です」との指摘がありました。この二つの宝を音楽文化の核にして、札幌の音楽芸術文化の土壌をさらに豊かにしていこうという、パネリストのメッセージを確かに受け取りました。

約二時間のトークが終りかけた時、我々にプレゼントがあることが告げられました。桐原宗生さんと富田麻衣子さんによるモーツァルトの「トルコ行進曲」。ヴァイオリンの二重奏でこの曲を聴くのは初めてでした。いっそう心に沁みました。

会員／村山英朗

（写真協力：ACF 梶田氏）

## スタッフの声

▼岩崎弘昌さんが退団なさった。音大を出てすぐに札幌に入団して40年以上、まさに札幌の顔だった。お疲れさまでした。札幌くらぶ会報74号の「本棚の隅から」に「江藤俊哉とアイザックスターンが新しいアンサンブルをつくり、35名の中に札幌から選ばれたメンバーは7人です。その中に岩崎さんが入っていた。1981年のことだった。2016年4月の時点で岩崎さんだけが残っている」と書いたのを思い出す。

（響）

▼岩見沢の札幌公演に行った。雪の壁の端にあつたホールはいい響きでした。ピアノの木村友莉香さんは帰国後2週間自粛しての出演。指揮者と目線を合わせ、柔らかに滑らかに奏でて、見事なオケとの合わせ技のモーツァルトでした。関さんは最初から強弱をつけながらのロングトーンが感動的でした。客演コンマスの小森谷巧さんは座ったままで体をいっばい動かし、オケ全体を引っ張っていました。地方はとにかく生の音が近くて発見が多い。嬉しい限りです。

（爽）

ありがとうございました

オーボエ副首席奏者

岩崎弘昌さん



「札幌くらぶの皆さん、お世話になりました」

2020年11月30日付退団